

カンボジア紛争「翻弄された国」

湯川修平（経済学科4年）

1990年の湾岸戦争，近年のユーゴ紛争，チエチエン内戦この世界では絶えず戦争，紛争が起こり多くの人がその犠牲となっている．

紛争を起こし，戦っている人達を支えているもの，駆り立てているものとは果たして何なのか．彼等は，何から自分達の伝統，家族，民族，誇り，国家を守ろうとしているのだろうか？また，アメリカ，ロシア（ソ連），中国などの大国・国連，NATOは何のために戦争，紛争にかかわるのか？僕は決して大国，国際機関が真っ白なイデオロギーを持って戦争，紛争に関わっているとは思わない．自国のための時代を作るべく武器，権力，エゴイズムを手に関わり，紛争，戦争を操作し解決していくのではないかと思っている．

そこで僕は，最も大国の時代造りのエゴが見られたと考える『冷戦』期における「カンボジア紛争」を題材として取り上げ，『冷戦』がカンボジアを取り巻く大国，隣国，国際機関，さらにはカンボジア国内における主要人物（主にポル・ポト）にどのような影響を与えたかという検証を試みようと思う．

カンボジア紛争において，カンボジア国内における主要人物は，多数見られる．どの人物もそれぞれに魅力的ではあるが，卒論ということでこの検証においては，あえて世界の悪者ポル・ポトにスポットを当て進めていこうと思う．

第1章 カンボジアの軌跡

）カンボジアと隣国の歴史

カンボジアに対する他国の介入は，カンボジア最強にして，最も栄えていたアンコール王朝（今でもカンボジア人は民族の誇りとしている）が下り坂にはいった12世紀頃と古い．東からヴェトナム，西からはタイにより領土を浸食され，15世紀にはいるとその浸食の圧力は増し1720年にはカンボジアはヴェトナムに服属する．さらに19世紀になるとカンボジアは東西に分割吸収されカンボジアという国自体なくなりそうになった時，大国フランスがカンボジアを保護領にする．アンコール王朝時代から19世紀までのカンボジアと隣国タイ，ヴェトナムの関係を簡単にみても『カンボジアの民族の誇り＝アンコール王朝』は隣国タイ，ヴェトナムにとっては苦難の時代であり，脅威の時代であったのではないか．カンボジアにアンコール王朝の栄華があったからこそ，その後の隣国タイ，ヴェトナムの領土浸食の激しさが続いたのではないだろうか？その激しさは現在のカンボジアの地図，閉じた巾着のような形で，海岸線が東西から絞られている（この結果カンボジアの多くの島も奪われた）のをみると分かる．さらに，大国フランスの「保護領」の真の目的は，カンボジアの保護ではなく帝国主義時代における太平洋，アジアにおけるフランスの一拠点としてのヴェトナムにその目的があったのではないかと思う．事実，保護領カンボジアとラオスの官僚に多くのヴェトナム人が登用され，ラオス人やカンボジア人の，本来フランス

へ向かうはずの憎しみや反感の一部は、強くヴェトナム人に向けられ、現在に至っている。このフランスによるカンボジアの反ヴェトナムはのちにポル・ポトという人物を生み出す事となる。（後に記述）

）第二次大戦以降のカンボジアの軌跡

第二次大戦中は日本がカンボジアを占領していたが、戦後・日本敗戦後再びフランスの植民地になる。しかし、植民地からの解放の気運が世界的に広がっていた 1953 年、カンボジアは王国として独立し、主権を回復した。（シアヌークが王位にあった）しかし、王政に反対するクメール・ルージュは、北ヴェトナムに接近し、明言はしないものの中国をモデルにした改革を目指していた。（中国のイデオロギーの取り入れ）1970 年、シアヌークの外遊中に、首相であったロン・ノル將軍の軍事クーデターがアメリカの力を背景にして成功した。アメリカはカンボジアを北ヴェトナムに対抗する勢力たらしめよと計画していた。（アメリカのイデオロギーの加入）しかし、北ヴェトナムがカンボジア領内に侵入しアメリカはカンボジアの、北ヴェトナムによって占領された地域への空爆を続けた。やがてヴェトナム戦争が終わるころになると、反動のロン・ノル、革命派のクメール・ルージュ双方ともに、各々の地域を確保して対峙するようになった。1975 年に、ポル・ポト率いる クメール・ルージュがプノンペンを制圧した。ポル・ポト派が政権についている間にカンボジア国内において、100 万から 200 万の人間が殺害された。やがてヴェトナムがカンボジアに侵攻し、ポル・ポトの追放に成功した。しかし、そこからのカンボジアの政情は奇怪きわまりない過程をたどる。ヴェトナムとあたらしい政府に対抗して亡命政権ができ、クメール・ルージュが復活しこれに加わり、あるうことか国連の席にクメール・ルージュが着くという滑稽な事態になる。次の章ではこの滑稽な事態を引き起こした『冷戦』とはカンボジア、大国にとっていったいなんだったのか検証してみたい。

第 2 章 冷戦におけるカンボジア

）冷戦というパラダイム

歴史家 E・J・ホブズボームは 19 世紀の末から 20 世紀はじめにいたる時代を「明らかに新しい型の帝国の時代」といつている。つまり、その期間にひとにぎりの国々、すなわちイギリス、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、ベルギー、アメリカ合衆国、そして日本がアフリカ、および太平洋地域を中心に世界を分割、支配していったのである。ホブズボームの指摘の中にはいくつかの興味深い点があるとおもう。そのひとつは、世界が先進国と後進国に分かれたこと、さらにこの分割が国家的膨張のひとつの段階であること。これはいうまでもなく資本主義の発達 of 度合によって世界がふたつに分けられたということ。僕自身、このように優劣によって世界を二分する世界認識は古くからあったのではないかと思う。ホブズボームは 19 世紀の末から冷戦にいたる時代を『列強が植民地を獲得した国々だとすれば、弱小国は、いわば、植民地を持つ「権利のない」国ということになった』と巧みに表現している。

第二次世界大戦が終わる頃から『列強国』アメリカ、ソ連の間には互いに相手の出方をうかがい、協力しながら信頼していない関係が生まれていた。そこには、民主主義を標榜するアメリカ

および西欧諸国と、全体主義的ソ連とでは、ナチ・ドイツと日本を相手に戦争中こそ協力しあえたものの、その関係を大战後も持続させることの困難さがあつたのではないと思われる。社会的、政治的体制がまったくことなり、あい入れる余地がないだけでなく、占領地（旧植民地）をどのように分割し管理するかという（列強国の『権利』の行使）実利問題からして、すでに対立が浮かんできていた。

このように、世界は再び異質なふたつのブロックに分割された。今度の分割は、先進国／後進国という対立だけでなく社会主義／その他の国々という対立、分かりやすく言うと、社会主義という一つのイデオロギー／アメリカ、西欧諸国の民主主義というイデオロギーの対立である。世界はほぼ完全に二極化し、政治、経済、文化および軍事のあらゆる対立することになった。これが『冷戦』と呼ばれた現実である。また、『冷戦』の特徴として、大国＝列強どうしが実際に砲火を交えることのない戦争を戦う（ストレスの時代）、イデオロギーにより「誰が敵なのか」という政治的決定がすでになされていることがあげられる。

自分は、ボブズホームが彼の著書で述べているように、決して『冷戦』は突如としてこの国際社会に現われた物ではなく、古くは産業革命からはじまり 19 世紀からの帝国主義を経てそれらが時代とともに進化した国家的膨張の段階であると思う。それは、列強国の栄華の歴史であり、弱小国・それにも劣るとされる国の悲劇、苦難の歴史ではないかと思う。そして、その歴史において（アンコール時代は別として）常に列強国の介入を受けてきた国、カンボジアで『冷戦』の全て、先進国／後進国の対立・イデオロギーの対立・ストレスの時代（代理戦争）・大国による「誰が敵なのか」という政治的決定がかい見えてくるのではないかと思う。そのような『冷戦』の集大成の国、カンボジアであったからこそポル・ポトのような人物が生まれ、イデオロギーの国際社会から激しく非難され、同時に見事保護・支援されたのではないだろうか。次の章においてカンボジア紛争において、また世界の歴史上においても僕自身が最も残忍に国を愛していたと思うポル・ポトにしばって検証してみたい。

第3章 ポル・ポト - 保護されてきた世界の悪者 -

ポル・ポトほど、現代に類をみない大犯罪を犯しながら、国際政治からの保護を享受し、しかも一向にみずからはその姿を世界に見せずに、その存在を秘密のベールに包んだまま死んだ人物（僕自身は本当は死んでいないのでは？と思っている）は他にも例がない。僕個人としても、この現代において最も激しく国を愛し、残忍と言われたポル・ポトに興味があり、なぜこの人物が国家、民族を守るために自民族を虐殺し、大国に対し戦いを挑んできたのかをポル・ポトの生い立ち、ポル・ポトを取り巻く世の流れをおりまぜながらこの章で検証してゆきたい。

）ポル・ポト派のルーツ

ポル・ポト派が 75 年 4 月から 3 年 9 ヶ月間カンボジアを支配したとき、数 10 万人とも 100 万人以上とも言われる国民を死に追いやる恐怖政治を貫いたのは、さまざまな要素がかさなった結果である。詰まり、同派は、

極左共産主義者の集まりであり、反革命勢力の血の静粛派当然であった。

クメール帝国の栄華回復を夢見る極端な民族主義集団で、クメール民族の純粋性維持のため、国内の少数民族に犠牲がでるのをいとわなかった。

外国とりわけ隣の強国ヴェトナムに対する疑惑心が強く、ヴェトナムとの関係が少しでも疑われる人々を物理的に排除しなければ、民族の独立は達成できないと信じきっていた。

武力闘争のかなりの過程を自力で勝ち抜いたため、指導部が極めて閉鎖的となり、自分達の主義主張以外、一切受け付けなかった。

など、『大量殺人』を可能にしたいいくつかの要素を指摘できると思う。

また、ポ・ポト派が狂信的な極左民族主義集団としてカンボジアに登場した原因は、カンボジア自体の国の歴史を抜きにして語れないし、指導者ポ・ポト氏の人間像を知らなければ、ポル・ポト派の分析に公平さをかくだろう。

この検証には、「歴史が人間をつくる」のか「人間が歴史をつくるのか」という大きな疑問が投げかけられると思うが、僕自身は、大国に翻弄されたカンボジアの歴史がポル・ポト氏という特異な民族主義者を生み、その民族主義者が「大量さつじん」の新たな歴史をつくったといえるのではないかと思う。

）ポル・ポト氏の履歴書

ポル・ポトは、1925 年、カンボジア中部で農家 7 男 2 女の 9 人兄弟姉妹の 8 番目として生まれた。本名 サロト・サル。ポル・ポトというのはゲリラ名である。

ポル・ポト氏が生まれる 60 年以上前の 1863 年から、カンボジアはフランスの保護領になっていた。フランス植民当局はカンボジア人を「怠け者」とみなし、より「勤勉」なヴェトナム人を重用しており、フランス式中等学校リセもカンボジアには設置せずヴェトナムだけに設置した。一方、農民には重税が課せられ、農民はますます勤労意欲を失い、重税と借金地獄の中で一層貧しくなる悪循環がつずいた。ポル・ポト氏が生まれたのは、カンボジアの農村がそうしたどん底の状態にあるときだった。

ポル・ポト氏は 6 歳のとき、プノンペンにいた兄を頼って上京し、3 ヶ月間仏門に入り修行したあと、小学校に通った。卒業後はそのまま中学校、高校へと進学していった。そろそろ植民地支配の理不尽さに気付いて良い年ごろである。その頃、カンボジア情勢は風雲急を告げる。第 2 次大戦でフランスがナチス・ドイツに降伏して弱体化したのを見て取ったタイが、20 世紀初めにフランスに奪われたカンボジアとラオスの領土回復を要求して、この年末カンボジア西部に侵攻したのだ。結局、カンボジアの領土が 4 分の 1 タイに割譲されたのだ。タイにとっては「失地回復」であっても、カンボジアにとっては手足を奪われたも当然であり、民族感情をいたく傷つけた。ポル・ポトが高校卒業後、プノンペンの兄のもとに戻り建築専門学校に通ったのはそんな時代であり、カンボジアはまさに政治的激動期を迎えようとしていた。ポル・ポト青年は否応なく政治の激流に巻き込まれることになる。日本軍は敗戦色濃くなった 45 年、カンボジアのフランス当局解体に踏切り、シアヌーク王は、カンボジアの独立を宣言した。しかし、日本の敗戦で独立は無効になり、カンボジアは再びフランスの支配下におかれた。ヴェトナムでは日本敗戦直後に

ホー・チ・ミンが独立を宣言し、これを認めないフランスと第一次インドシナ戦争が始まった。ところがカンボジアにはフランス支配および王位を維持したシアヌークを脅かす武力闘争を展開できる勢力は存在しなかった。そのころポル・ポト氏は学生活動をしており、フランスからの即時独立を主張する民主党の手足として活動しており、支援の全国ストを呼びかけていた。しかし、シアヌーク王はフランスとの交渉を重視しておりポル・ポト学生達の動きを批判していた。失望した学生指導者たちは、カンボジア政府からの奨学金でパリへ留学する道を選び、ポル・ポト氏は49年フランスにむかった。ポル・ポト氏が本格的に左翼思想に目覚めたのは、フランス留学時代だった。パリには当時、カンボジア人学生によるマルクス主義研究会があり、ポル・ポト氏とイエン・サリ（後ポル・ポト派ナンバー2となる）はこの研究会で無二の親友となる。この、マルクス主義研究会は、後のポル・ポト派中核グループの母体となった。ポル・ポト氏は3年余の留学中にフランス共産党に入党、シアヌーク王と王政を批判する論文を発表するなど政治活動に没頭した。これがたたってカンボジア政府の奨学金を停止され、53年に27歳でプノンペンの兄のところに戻る。パリから帰国したポル・ポト氏は筋金入りの共産主義者になっていた。ポル・ポト氏は帰国後党籍をフランス共産党からヴェトナム人が主導権を握るカンボジア人民革命党に変更し、カンボジア東部のジャングルで地下活動にはいる。

シアヌーク王の粘り強い交渉が功を奏し、54年のジュネーブ協定でカンボジアはフランスから完全独立した。しかし、ポル・ポト氏は「この独立は王権を強化するだけ」と冷やかな目で見ていた。ジュネーブ協定で第一次インドシナ戦争が終結し、ヴェトナム共産軍はカンボジアから引き揚げた。しかし、ポル・ポト氏らカンボジア共産勢力は、ジュネーブ協定の内容に失望した。ヴェトナムの共産勢力は中ソの圧力を受け、ヴェトナム北半分の支配を認めてもらう代わりに、カンボジアへの支援停止を受諾してしまったからだ。ポル・ポト氏らは、ソ連や中国そしてとりわけヴェトナムに裏切られた感情を抱いた。後年のポル・ポト政権による「大量殺害」では、「ヴェトナムのスパイ」だとして処刑された人がかなりいた。また、78年の末のヴェトナム軍のカンボジア侵攻の引き金となったのは、ポル・ポト軍のヴェトナム領攻撃だったし、89年のヴェトナム軍主力部隊のカンボジア撤退後も和平に手間取ったのは、ポル・ポト派のヴェトナム不信が大きな原因の一つとなった。ポル・ポト派のヴェトナムへの敵外心が近年のカンボジアの悲劇の要因のひとつではないか。

）ポル・ポト党のトップに

ジュネーブ協定に基づいてヴェトナム共産軍が撤退するとき、カンボジア共産主義者の大半はヴェトナム人になりすまし、ハノイに渡った。残ったのは、ポル・ポト氏らほんの一握りだった。プノンペンに残ったポル・ポト氏らは、教師やジャーナリストとして身分を隠すかたわら、党勢拡張に努めた。しかし、共産勢力は、「独立の父」として人気絶大だったシアヌーク王のまともな敵になり得なかった。シアヌーク王は独立後初の55年の総選挙を前に突然王位を父に譲り、自分は政治組織「人民社会主義共同体」（サンクム）を結成して政治の最前線に登場した。サンクムは総選挙で全議席を独占して圧勝し、共産勢力が作った合法政党、人民党はわずか3%の得票率で

惨敗した。勢いに乗るシアヌーク殿下は、王制を脅かす国内共産主義残存分子の徹底取締に乗り出す一方、外交では中立主義をとり、北ヴェトナムや中国の歡心を買った。カンボジア共産勢力の潜在的支援国との関係をよくし、これらの国から共産勢力への援助を未然に防ごうという、`高等戦術`だった。ポル・ポト氏らわ、シアヌーク政権への経済援助を開始した北ヴェトナムや中国に不信感を強めた。壊滅の危機に直面したカンボジア共産勢力は再建の必要に迫られ、60年秘密会議を開き等最高の「書記」に トー・サムート氏を選出する。この時ポル・ポト氏は序列三位の幹部となる。その後、カンボジア共産党内部で異変が起こる。トー・サムート書記が惚然と姿を消したのだ。当時はシアヌーク政権の秘密警察に殺されたと見られたが、実はポル・ポト氏が権力奪取のため書記を殺した、とのちのヘン・サムリン政権当局者はきめつけた。

）恐怖政治の原点

ポル・ポト氏らがジャングルに消えた頃、ヴェトナムではアメリカが軍事介入の度合を強めていた。ヴェトナム共産党は60年までに「南部解放」の方針を決め、ラオスとカンボジアのジャングル地帯を抜ける「ホーチミン・ルート」などを使って南ヴェトナムに共産軍兵士を送り込んでいた。56年アメリカが北爆が開始されると、北ヴェトナムは「ホーチミン・ルート」をカンボジア領内に確保するために、シアヌーク殿下との関係をさらに強化する道を選択した。アメリカ軍の軍事介入から数ヵ月後、ポル・ポト氏はひそかにハノイを訪れ、シアヌーク打倒闘争への支援を北ヴェトナムに要請した。しかし、「時期尚早」を理由に拒否され、ジュネーブ協定に続くヴェトナムの「裏切り」に怒った。ポル・ポト氏はハノイを訪れた足で中国へ向かい、ここに5ヶ月滞在した。中国もカンボジアでの武力闘争開始にゴーサインを与えなかった。しかし、中国では当時、文化大革命がまさに始まろうとしており、ポル・ポト氏は文化派の極左路線にかなり感化されたといわれる。

ヴェトナム、中国から戻ったポル・ポト氏は、カンボジアの「解放闘争」に他の社会主義国の支援を当てにできないことを悟った。この様な、中国、おなじインドシナの共産主義同胞の度重なる裏切りにより外から、内からも孤立してしまったポル・ポト派はのちに実権を握るといっそう異質で秘密主義的な集団となったのではないかと思う。ポル・ポト派がなぜ、異質で秘密主義的になったのかという要因はつかめたようにおもうが、ポル・ポト派はどのようにカンボジア国民を統制、していったのだから。

）民心の獲得

ポル・ポト派が戦闘の中心になってからわずか2年間でロン・ノル政権を打倒できたのは、「革命」意識に燃えた強力な軍隊をつくりあげ、加え国民の9割を占める農民多数の支持を獲得できたからといえるだろう。北ヴェトナム軍がカンボジアでの戦闘の主力だった3年間に、ポル・ポト派は兵力をそれほど消耗背図、逆に増強することができた。ポル・ポト軍は、ポル・ポト氏を中心とするイデオログ集団に率いられ、鉄の規則に支配されていた。これに引き換え、政府軍の軍紀の乱れは目を覆うばかりだった。ポル・ポト派は、ゲリラ戦に必要な武器弾薬、ガソリン、医薬品などを、腐敗した政府軍将兵から容易に入手することができた。カンボジアの農村では当

時、小規模な自作農が一般的であり、革命の火種となり得る大地主と小作農の対立はほとんど存在しなかった。また、農民は政治問題におおむね無関心であった。しかし、ロン・ノル政権の重税に苦しめられ、汚職に怒っていた。ポル・ポト派の共産主義イデオロギーはそれまでの生活と異質だったが、農民のユートピアをつくり、民族の栄光を回復しようというスローガンは、農民の反都市、反中央感情にアピールした。「解放区」では厳しい生活統制が課されたものの、ポル・ポト派兵士は農民と一緒に土木工業や農作業に汗を流し、農民だけを牛場のように扱うことはまだなかった。また、政府軍と違い、兵士による略奪や婦女暴行といった犯罪や腐敗行為も皆無だった。ポル・ポト派がシアヌーク殿下を名前だけトップに据えた戦術も成功した。農民には殿下への敬愛の念が強く、農村の少年の間から、容易に兵士を募ることができた。75年ポル・ポト派は首都プノンペンを制圧し、ロン・ノル政権は崩壊した。総攻撃には、中国から引き渡され大量の武器が投入された。かつてポル・ポト派援助に慎重だった中国はその約1年前、最高軍司令官だったキュー・サムパン氏を北京に招き、軍事援助強化を約束していた。最後のプノンペン攻撃には、戦後のカンボジアで影響力回復を狙うヴェトナム軍の二個師団も加わった。カンボジアをめぐる中国とヴェトナムの綱引きがすでに始まっていた。ロン・ノル政権に批判的だったプノンペン市民は「解放軍」を歓迎した。それも束の間、ポル・ポト派のプノンペン制圧後、市民は、老人も、乳児も、身体障害者も、一人残らず直ちに立ち退きを命じられた。ポル・ポト政権の恐怖政治の始まりである。兵士に追い立てられ、これからどんな運命が待ち受けているかも知らぬまま歩く群衆の中にポル・ポト氏のお兄さんもいたのであろうか？

）ポル・ポトを検証してみて

第二章においてポル・ポト氏を履歴書的に検証してみたのだが、僕には、ポル・ポト氏が単に冷酷、残忍な民族主義者にはみえなかった。少なくともポル・ポト氏には、今の日本の若者、政治家以上に真剣に国家を愛していたし、積極的に政治に関わろうとしていた様に思われる。それを、一国家イデオロギー、一時代の流れがポル・ポトを傷つけ、故意に突き放し、引き寄せ、利用した。先に、「歴史が人を作るのか」それとも「人が歴史を作るのか」という命題をあげたが、このカンボジア紛争における、ポル・ポト恐怖政治における「大量虐殺」においては『冷戦という一歴史がポル・ポトを生み』、『大国のイデオロギーが大量虐殺という歴史を作った』のではないかと思う。また、大国のイデオロギー、冷戦は「大国主導の妥協」によりカンボジア紛争を都合良く終結させるのである。

第4章 大国のはざままで

）カンボジア紛争とは何だったのか？

カンボジア紛争の発端のひとつの要因に、78年のヴェトナムのカンボジア侵攻があると考がえられる。79年、ヴェトナムの後押しによりプノンペン政権（ヘン・サムリン政権）が樹立された。それにより、極端な共産化政策で数10万とも数100万とも言われる自国民を死に追いやり、国際的にも評判の悪かったポル・ポト政権は打破され、その後、西部タイ国境を中心にゲリラ戦を展開することになる。ヴェトナムのカンボジア侵攻を理解するには、ポル・ポト政権の70年からの

ロン・ノル政権との武力闘争の過程においてカンボジア共産党内部の親ベトナム派を静粛した
いわば、ポル・ポト政権のその極端な民族主義的イデオロギーによるベトナム国境侵犯の繰り
返しがベトナム侵攻のきっかけの一つであるということを知っておく必要がある。また、ヴェ
トナム軍侵攻の裏には当時険悪化していた中国とベトナムの関係、さらには中ソ対立があった。
事実、中国はポル・ポト派を支持し、ベトナムはソ連の援助を受けていた。そんななか、ヴェ
トナムの伸長に脅威を感じていた ASEAN 諸国は、シアヌーク殿下と西部国境地域でゲリラ活動を
展開していたソン・サン元首相とポル・ポト派をくっつけた『三派連合政府』を発足させバック
アップした。三派連合はそもそもプノンペン政権をベトナムのかいらい政権とみなし、存在す
ら認めていなかったのと同じテーブルについて交渉することすら考えられず、カンボジア紛争は
冷戦構造を反映した『代理戦争』としての対立が固定化された。80年代後半にはいると、ソ連で
はベレストロイカが開始され、ベトナムにおいても86年『ドイモイ（刷新）』政策が採用され
るなどカンボジアを取り巻く国々の対外政策に変化の兆しが現われてきた。一方の ASEAN をはじ
めとする西側諸国もプノンペン政権の実効支配派武力では崩せないとの認識が広がりつつあった。
こうした変化に、シアヌーク殿下は和平のイニシアチブをとる決意をした。

）カンボジアをめぐる和平交渉

僕個人の考えとしては、和平交渉はポル・ポト政権が倒された1979年にされるべきであらうと思
う。しかしカンボジアには、政治的“災害”をもたらした『東西対立』の枠組みは、1979年の時
点においても健在であり、むしろ東西対立、米国・西欧ブロック・中国と、ソ連・東欧ブロック
は激しく非難しあっていた。そのような背景のもとにおいて、ポル・ポト政権が倒れたあとも和
平は実現されることなかった。カンボジア政府内においても反ベトナム闘争を継続させるため
にはポル・ポト派の武力が必要であったし、ポル・ポト派だけでは国際社会の支持（国連の代表
権など）を得ることはできなかった。そうした事情が水と油の3者を結び付け「三派連合政府」
による政治が行われていた。和平交渉の動きを見る前に、カンボジアを取り巻く役者の相互関係
に触れておきたい。

1.ポル・ポト 派 VS ヘン・サムリン

まず、1979年から1982年にかけての主に中国が支援するポル・ポト派對ソ連・東欧ブロック
が支援するベトナム軍とヘンサムリン軍の対立を見てみる。ヘン・サムリン軍とはいっても、
ヘン・サムリン軍＝プノンペン政権つまりベトナムのかいらい政権であったので正確には、ポ
ル・ポト軍對ベトナム軍という構図になるのではないかと個人的には考えてる。また一方、
ポル・ポト軍もこの頃になると国内から一掃され、国民全般からの支持があったとはいえない。
しかも、ポル・ポトの兵力は負け残った兵力によるゲリラ戦だけであった。それにもかかわらず、
なぜベトナム軍がこの時期にポル・ポト軍をたたけなかったかという点、中国が1979年にヴェ
トナムへの侵攻を行っており、さらなる「第二次攻撃」もありうる情勢であったために、ポル・
ポト軍のだけの動向に集中することができなかったのである。

2.三派連合 VS ベトナム、ヘン・サムリン軍

1982年から1989年にかけて、中国の支持、支援する ポル・ポト軍対ヴェトナム軍の支える『ヘン・サムリン政権軍』という、第一段階の対立構造は拡大、長期化しつつあり、中国、ASEAN 諸国、西側諸国が支援する「三派連合」対ソ連、東欧ブロックが支援するヴェトナム軍、ヘン・サムリン軍というように、まさしく、『冷戦代理戦争』という第二局面を迎えることとなった。1,2の様に1979年から1989年までのカンボジア、それを取り巻く各国の動向をみるとカンボジア紛争は、まさに、大国対大国の戦争にまで発展しそうな勢いを含んでいたように思える。しかしその後、カンボジア紛争は和平（パリ協定）への道へと急変していく。

第5章 UNTAC

）大国の和平へのイニシアチブ

どうして、大国対大国の戦争にまで発展しつつあったカンボジア紛争が、急に和平へのプロセスへはいつていつたのだろうか。その背景を検証してみたい。

1989年に始まるソ連の崩壊によってヴェトナム、ヘン・サムリン政権、ともに主な政治的経済的後盾を失い、方向転換をせまられた。

ヴェトナム内において、経済再建を柱とするドイモイ（刷新）が進み、国内経済政策、外交政策の変更に伴い、カンボジアおよび「カンボジア問題」へのスタンスが変わった。

1989年、中国が市場経済（資本主義）の導入をはかるプロセスにおいて、政治的自由を求める民主運動が大きくなる。中国は、これを鎮圧する『天安門事件』で国際社会から孤立し、人権問題などで非難を受けることになった。そのため、同じような意味合いで問題を持っていた「ポル・ポト支持」が重荷になり『カンボジア問題』の終結を目指すようになる。

米国は、基本的な冷戦終結＝東西対立の解消のなかで、ソ連、ヴェトナムをそれ以上敵視する必要がなくなったと感じ、市場としてのインドシナ入りに遅れなくなかった。

日本は、カンボジア問題を解決するなかで、主導権を発揮し、戦後初といえる外交的成果を挙げることを目指し、カンボジア問題を国連および国際社会での一人として認めてもらう機会としたかった。あわせて、市場としてのインドシナに遅れなくなかった。

ASEAN 諸国において、インドネシア、マレーシアはそもそも、歴史的経緯においてヴェトナムより中国（中国共産党）を警戒していた。フィリピンは時刻の政治、経済の再建に忙しくカンボジア問題どころではなかった。残る、タイ、シンガポールが主にヴェトナムへの警戒心から、政治的強硬派としての発言を続けてきたがこの対立が構造的にもこれ以上は続かないことを察知しまとめ役にまわりながら、インドシナ市場への参入、今後の経済的利益を求める方向へきりかえた。

ポル・ポト派、シアヌークは、ソン・サン派の三派は各々の支援国からの政治、財政の支援が打ち切られれば単なる非合法武装勢力、利益団体にすぎない。

以上のように、関係者国（者）が各々弱み、都合をもって妥協点をめざしたものが、『パリ和平協定』ではなかったかと自分は考えてる。それを、テレビの前で流れる和平案調印式を見て人々は手をたたき、喜び、安堵感にひたる。しかし、上のようなことを皆が知っていたとすれば、手

をたたき、喜び、安堵感にひたれたであろうか。カンボジア紛争に関する本をよむと、カンボジア人の間だけで解決する道と言うのも模索されたようだが、カンボジア紛争がもともと、大国などにより国際的に持ち込まれただけにそこには限界があった。また、国内の優れた指導者あるいは、指導者になったであろう人々を大量に、集中的にポル・ポト時代に失っていたために自主制、主体制を発揮できなかったことが、カンボジア人の間だけで解決できなかった要因の一つにあげられるのではないか。

）パリ協定と UNTAC

パリ協定の骨子は次のようになっている。

- ・国連安全保障理事会は、文民と軍事による国連カンボジア暫定行政機構（UNTAC）を設置する。
- ・カンボジア最高国民評議会（SNC）を移行期間中のカンボジアを代表する唯一の合法機関とする。
- ・政治的中立を確保するため国連は行政機関などを直接管理下におく。
- ・議長（シアヌーク）は SNC が UNTAC に行う助言権をもつ。
- ・議長が決定できない場合は決定権を国連事務総長の特別代表に委託する。
- ・総選挙は各州ごとに比例代表制で行う。

僕個人の考えでは、ポル・ポト派を含めた形での『和平の実現』にはもともと無理があったように思えてならない。関係国の「妥協」の一つとして中国の顔をたてて無理にポル・ポト派を入れた枠組みは、ポル・ポト派に選挙参加の意思がなかっただけに、選挙までのプロセスをまわいくどいものとしたのではないか。だいたい、選挙で得るものがないポル・ポト派には、選挙を通しての和平実現の過程に全く興味がないことは、UNTAC 登場以後の 1 年間で明白になっていた。例えば、プノンペン政権はじめ、他の三派が和平協定に基づき 7 割の兵力削減に協力してきたのに対し、ポル・ポト派は自らの支配地域のへの視察すら一度も受入れず、兵力と武器を温存し支配地区の拡大にこの期間を利用してきた。さらに、93 年までには、ポル・ポト派による 1000 名をこえるヴェトナム系住民の大量虐殺、銃撃による 2 名の UNTAC 兵士の死亡、さらに、プノンペン市内でのテロ活動。もはや、選挙への非協力というより、積極的な妨害活動ではなかったか。

）UNTAC の残した 課題

UNTAC の活動は「終わり良けれ全て良し」ではなく、残された課題、教訓もまた多い。ポスト冷戦期の地域紛争が頻発している現代において、今後国連は、どのように紛争に関わっていくべきなのか UNTAC の経験をとおして問われているのではないか。一部のカンボジア人のなかには、SNC に超越した形で UNTAC が存在していたことに、主権の侵害として捉えていた人達もいた。また、多くのカンボジア人過剰ともいえる期待で『パリ和平協定』UNTAC を受けとめていたが停戦、和平へのステップが進まず、生活が苦しくなっていくばかりの現実を直視するようになった。軍事部門の重洋な問題として、PKO 活動の部隊をどこの国に求めるべきかと言う問題があった UNTAC の場合、タイの工作部隊をタイ カンボジア国境に配置させたことは、国際社会また、カンボジア国内においても批判の声がきかれた。カンボジア西部地域はタイ領だった歴史もあり、その特殊な利害関係からいってタイの領土的、政治的野心がうたがわれた。カンボジア人の民族感情を考

慮すべきであったように思える。一般化して言えば、派遣国が非派遣国に強い利害関係を持てば持つほど、派遣国がその要員を展開させることに強いインセンティブがあり、PKO の効果が上がるというメリットがある。しかしそれとは裏腹に、非派遣国の反発を招いたり国連の中立性が疑われるなどの問題が生じてくる。こうした国からまざるを得ない PKO 派遣と非派遣国の民族感情とのバランスをいかにしてとるかという問題は、今後国連の重用課題の一つとなるのではないかと思う。

むすびにかえて

ここまで、カンボジア紛争をいろんな視点から検証してきたわけだが、今回強く感じたことは、冷戦における『カンボジア紛争』とは現代国際社会、政治の全てが反映されていた紛争ではなかったかという疑念であった。それは、言い替えるなら大国が、自国の国益のために、イデオロギーの誇示のために小国（カンボジア）へ巧みにイデオロギーという武器をもたせ、代理戦争をさせ、冷戦が終結するや否や、『調停者』として現われ大国間の妥協という名の『和平』をわたし紛争地を戦場へとかえていく。この武器を売り援助するほぼ同じ顔ぶれが次には『平和の使者』、『調停者』として現われる。現代国際社会の奇妙な構造をポル・ポト氏は気付いていたのではないかと僕個人は思う。そう考えるとポル・ポト派がジャングルの奥深く潜んでいたことやどちらのイデオロギーにも属さずポル・ポト派によるカンボジア独自の改革を強行していたことがひどくしっくりくるのである。しかし、ポル・ポト派によるカンボジア改革、家族の拒否、子供の国有化、通貨の無効化などの強引かつ残酷な改革のむこうにポル・ポト氏自身、新カンボジアのユートピアというはっきりとした青写真が見えていたのか疑問に思う。

冷戦終結後の今日の国際社会において「民族紛争」という新たな問題が頻繁化しているが、カンボジア紛争のときと同じように「民族紛争」にたいする国際社会、国際機関のありかたが問われている。国際社会、国際機関の実権のおおくが大国によって握られているため決して有効かつ柔軟な対応がなされているとは思えないのが現実である。

今一度、過去となってしまった『カンボジア紛争』を検証する必要があるのではないか？